

季節展示コーナー「春の植物」から ー春植物の生活史特性と保全ー

指 村 奈穂子

早春の落葉樹林を彩る花々のうち、3月上旬に地表に姿を現し、開花・結実して、5月上旬には樹木の葉の展開とともに地表から姿を消し、地中で休眠に入るものを「春植物」と呼びます。これらの植物は、早春から初夏までのわずかな期間に、生育や成長と繁殖のためのエネルギーを蓄える必要があるため、限られた生育地でしかみることができません。埼玉県では、フクジュソウ、イチリンソウ、ニリンソウ、アズマイチゲ、セツブンソウ、ヤマエンゴサク、ジロボウエンゴサク、カタクリ、アマナ、キバナノアマナなど十数種類が知られています。このうちいくつかの生活史や生育地の特徴から、春植物を保全するためにできることを考えてみましょう。

カタクリは、しばしば群生して、早春の落葉樹林の林床を鮮やかな紅紫色に飾ります。本種は成熟状態になると何年にもわたり開花を繰り返す、多回繁殖型の多年草です。開花までには最短でも7～8年かかります。ようやく開花できるサイズに成長した個体でも、翌年には無性の一枚葉段階へと逆戻りする場合が多く、有性ー無性、無性ー有性を繰り返し、成長して一定の大きさに達すると、複数年にわたり開花を継続する、という生活史の特徴があります。このため、カタクリを保全するためには、展葉・開花期には踏みつけにさらすような状態は避け、幼植物の保全に留意しなければなりません。



フクジュソウは、まだ雪の残る3月でも、雪の層を突き破って葉を広げ、鮮やかな黄色の花を咲かせます。本属の全国的な分布をみると、東北～北海道には連続して分布するものの、西日本では石灰岩地などの特殊岩石地に限定されています。埼玉県でもその分布は非常に限られ、10数ヶ所の自生地が知られており、天然記念物に指定され

ているところもあります。また、フクジュソウは、この縁起の良い名前からか、古く江戸時代から園芸的に栽培されてきました。野生のフクジュソウは、他の場所へ移植しても、自力で個体群を維持できない可能性が高いのです。残された少ない生育地において、盗掘や環境変化からフクジュソウを守ることが大切です。



ヤマエンゴサクは、独特なブルーの花を束ねて咲かせる植物です。その交配システムは、近縁のエゾエンゴサクでよく調べられており、真性他殖型で、同花受粉、隣花受粉では種子形成ができません。花粉は、開花期に既に葯が裂開しているものの、花卉を開けるのはハチ類のみで、受粉は送粉者の体についている他家花粉と自家花粉が入れ替わることによって起きます。自然状態に比べて人工授粉をすると、結実率が上がることから、受粉時の花粉の過不足が種子数を大きく左右していることがわかります。エゾエンゴサクの花には、様々なハチ類が訪れますが、受粉に貢献しているマルハナバチの他に、盗蜜をするオオマルハナバチ、そのおこぼれにあずかる外来種のセイヨウミツバチなどが混在します。昆虫同士の種間関係を含めた健全な自然環境の維持管理が、ヤマエンゴサクの保全に重要と考えられます。



このように春植物は、それぞれ独特な生態的特徴を持ち、自然環境に対する適応の象徴といえます。これら春植物をその生育地で守り育て、豊かな自然環境を残したいものです。

(さしむら なおこ・主事)